

当院における母乳育児支援に対する母親の満足度

前川 由希¹⁾, 加藤千恵子²⁾

Key Words : 母乳育児, 満足度

はじめに

当院は道北地域における数少ない分娩施設の1つである。母乳のみで育てたい、ミルクを追加していきたいなど、母乳育児に対する多種多様なニーズを持つ妊産婦が集まるため、そのニーズに合わせて支援を行って行く必要がある。これまでのケアを省察すると「指導内容がスタッフによって違った」「赤ちゃんの体重が減って退院が延びるならミルクを足したかった。」など、妊産婦のニーズに沿わない支援となったケースもあった。そのため、今回は当院における母乳育児支援に対する母親の満足度を調査し、支援の問題点や課題を明確にすることを目的とする。

また、児の月齢が上がるごとに母乳のみで育てている人が減っているため、入院中の現状だけではなく、退院時と1か月健診時の母乳確立の状況も把握し、実態を調査する。母乳育児は数カ月から数年の間継続していくものであり、入院中だけでなく退院後のことも考えて支援する必要がある。退院時と1か月健診時の母乳確立の状況を調べることで退院後の現状も明らかになり、今後、退院後の支援や課題を見いだせると考える。

対象・方法

1. 研究対象

H25年8月から10月までに当院で分娩した褥婦100人。

除外対象は、経膣分娩時の出血1500ml以上、重症PIH、内服治療のため母乳禁止、NICU入院の児、哺乳に支障がある児(口唇裂や口蓋裂など)、多胎事例とした。

2. 調査期間

調査期間はH25年8月～10月までの3か月間。

3. 研究方法

1) 調査方法

経膣分娩をした褥婦は産後4日目の朝、帝王切開をした褥婦は産後6日目の朝に研究協力を願い、同意が得られたらアンケート用紙を配布し、退院までにBOXに入れていただき回収した。アンケート以外の情報は、分娩時の情報(例:出血量や分娩所要時間)や1ヶ月健診時の授乳状況は助産録や電子カルテから情報を得ることとし、アンケート配布時に承諾を得た。情報は、番号処理とし、個人が特定されないように行った。

2) 分析方法

一次分析として全ての変数に対して基本統計量を算出した。その後、Kruskal-Wallis検定、Mann-WhitneyのU検定を行った。

4. 倫理的配慮

当院の倫理委員会の承認を得た後、研究協力者に対して調査の概要を文書と口頭で説明し、調査協力依頼を行った。アンケートは番号処理し、アンケート以外に分娩時の状況や1ヶ月健診時の授乳状況などは電子カルテや助産録から情報収集をさせてもらうこと、協力に同意しなくても何の不利も被らないこと、データを破棄するときには紙はシュレッダーにかけること、研究で得た情報は研究以外の目的では使用しないことを説明した。また、アンケート用紙をBOXに入れた時点で同意したものと判断した。

結果

1. 対象者の特性

配布した100人のうち回収した90人(回収率・有効回答率90.0%)を分析対象とした。

対象者の平均年齢は29.19±5.012歳であり、範

1) 名寄市立総合病院 看護部 3階西病棟

2) 名寄市立大学 保健福祉学部 看護学科

囲は19～43歳であった。また、初産婦は42.2% (38/90)、経産婦は57.8% (52/90)であった。分娩様式は、経膈分娩73.3% (66/90)、帝王切開23.3% (21/90)、吸引分娩3.3% (3/90)であり、分娩時出血量の平均は、817.1±502.7mlであった。在胎週数は、平均38週6日±1週1日であり、出生時の体重は平均3001g±359gであった。

2. 授乳方法に関する当初の希望と実際

授乳開始以前、「ぜひ母乳」「できれば母乳」で授乳を希望している人は79.1% (68/86)、「混合希望」20.9% (18/86)、「ミルクのみ」0%であった。

母乳育児をしようと思ったきっかけは「母乳のメリットを知ったから」が1番多く55.6% (50/90)、次いで「上の子が母乳栄養だったから」26.7% (24/90)、「上の子が母乳栄養できなかったから」10.0% (9/90)であった。

退院前日の栄養方法は、「母乳のみ」で授乳している67.0% (60/90)、「混合」33.0% (30/90)、「ミルクのみ」0%であり、当初の希望より実際に母乳栄養を行っている母親は少ない結果となった。なかには授乳を行っていくうちに栄養方法の方針が変化していった人もおり、授乳開始以前は母乳栄養を希望していたが、実際には混合栄養に変わった人13.6% (12/88)、混合希望だったが母乳栄養に変わった人が1.1% (1/88)だった。「母乳栄養希望」が「混合栄養希望」に変わった理由は、「赤ちゃんの体重が増えないから」66.7% (8/12)が一番多く、次いで「赤ちゃんが上手に吸ってくれないから」58.3% (7/12)、「自分が上手にあげられないから」・「頻回授乳で辛いから」が41.7% (5/12)であった。

1か月健診時の児の栄養状態は、母乳栄養が53.0% (44/83)、混合栄養が37.3% (31/83)、人工栄養が9.6% (8/83)であり、退院時よりもさらに母乳栄養で育てている人は減っていたことが明らかとなった。

3. 入院中の母乳育児支援に対する満足度

満足度を「とても満足」から「とても不満」の6段階で回答を得た。「とても満足」36.0% (31/86)、「満足」46.5% (40/86)、「やや満足」15.1% (13/86)、「やや不満」1.2% (1/86)、「不満」1.2% (1/86)であり、「とても満足」「満足」と回答した人を合わせると82.5%と満足度が高いという評価であった。

「とても満足」「満足」の理由では、「母乳が出るようになった」「指導・説明してもらえた」「看護師の対応がよかった」「尊重してくれた」「ミル

クや糖水の追加ができる」等があった。「やや不満」「不満」の理由では、「なかなか上手く授乳できなかった」「毎回担当が違うので相談しにくい」「スタッフによってすごく親身になってくれる人と他の仕事が忙しすぎてやっつけ的に扱われることもあり差がある」「糖水やミルクを足したほうがいいか迷った時に相談にならなかった」が挙げられている。しかし、「満足」と答えた中に「もっと教えてほしかった」「母乳育児について助産師と話し合えるとよかった」「乳頭保護器を勧めるのが早い」「説明不足」など理由や意見があった。

4. 入院中の母乳育児支援に関する満足度別、特徴

1) 入院中の母乳育児支援に関する満足度と経膈分娩4日目・帝王切開6日目における授乳方法 (図1)

入院中の母乳育児支援に関する満足度を「とても満足」「満足」「やや満足」と回答した人は、経膈分娩4日目・帝王切開6日目に母乳育児である割合が高かった ($P=0.038$)。

2) 入院中の母乳育児支援に関する満足度と疲労度の関係 (図2)

入院中の母乳育児支援に関する満足度を「とても満足」「満足」とした人は、あまり疲れていないという疲労度1, 2を選択した割合が有意に高かった ($P=0.001$)。

5. 入院中の新生児の母乳育児確立状態別の特徴 (図3)

入院中に母乳のみか、糖水を足す程度で母乳育児を確立できた人は、1か月健診時において母乳である割合が有意に高かった ($P=0.002$)。

考察

1. 授乳方法に関する当初の希望と実際

平成19年に厚生労働省が調査したデータ¹⁾では96%の妊婦が母乳で育てたいと考えている。そのデータと比較すると当院では79%と低い結果となった。混合栄養希望が多い理由としては、すぐ仕事に復帰しなければならない、土地柄農業や酪農業手伝いが多いため、育児と仕事の両立の為に混合栄養を希望する方が多いことが考えられる。

母乳栄養をしようと思ったきっかけとして、「上の子が母乳栄養だったから」「上の子が母乳栄養できなかったから」が挙げられた。母乳育児を考える際に前回の授乳体験が影響していることが明らかとなった。そのため、私たちが母乳育児支援を行う際、今回の母乳育児が次の母乳育児に影響を与えることを踏まえてケアを行わなければならないと考える。

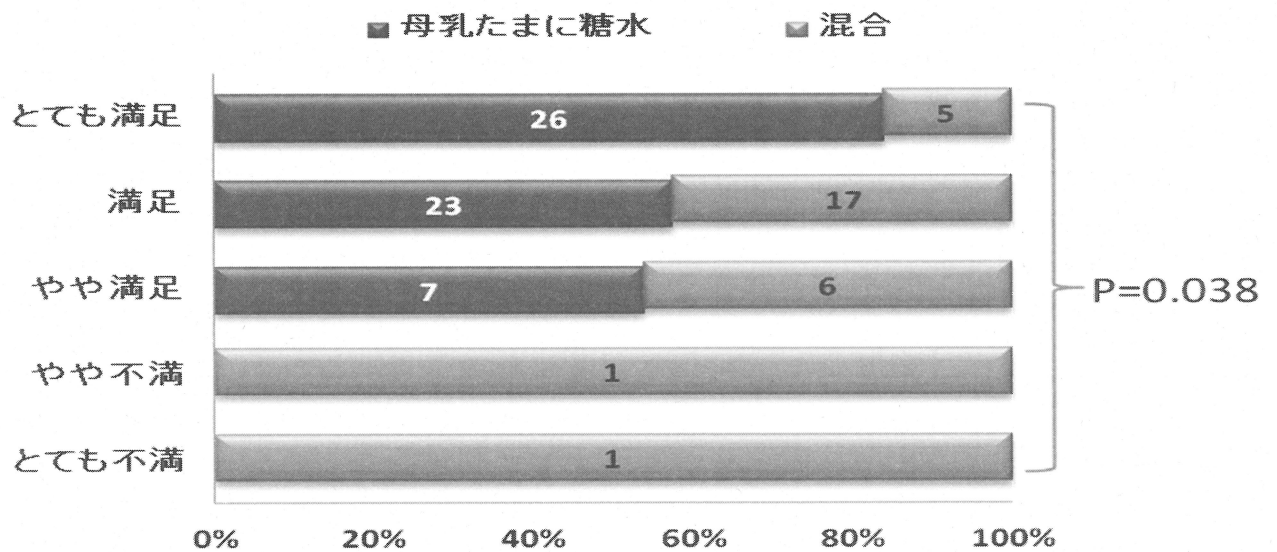


図1 入院中の母乳育児支援に関する満足度と経膈分娩4日目・帝王切開6日目における授乳方法

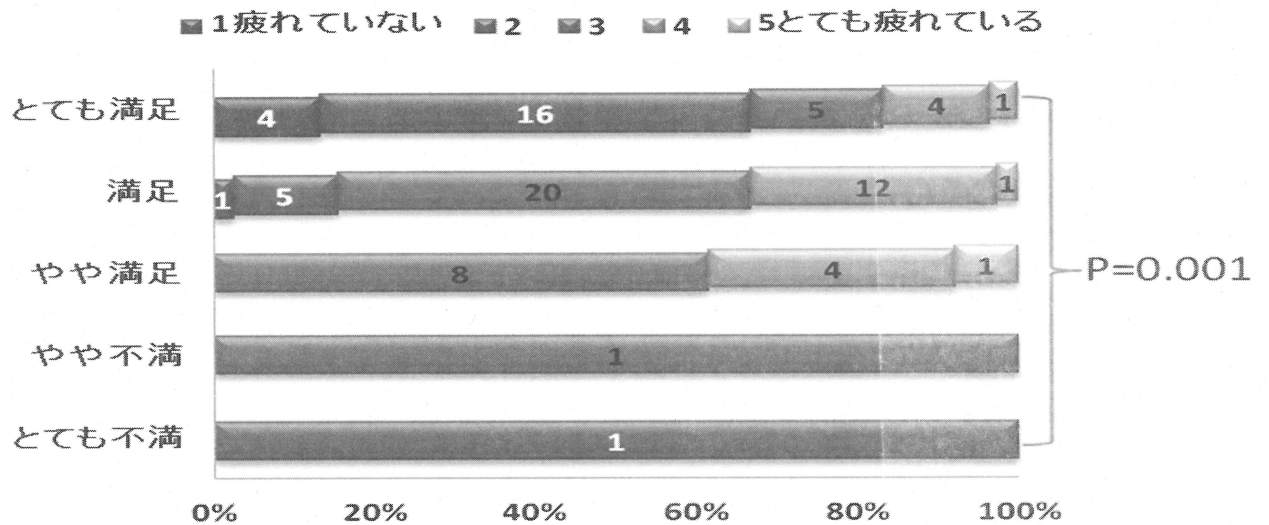


図2 入院中の母乳育児支援に関する満足度と疲労度の関係

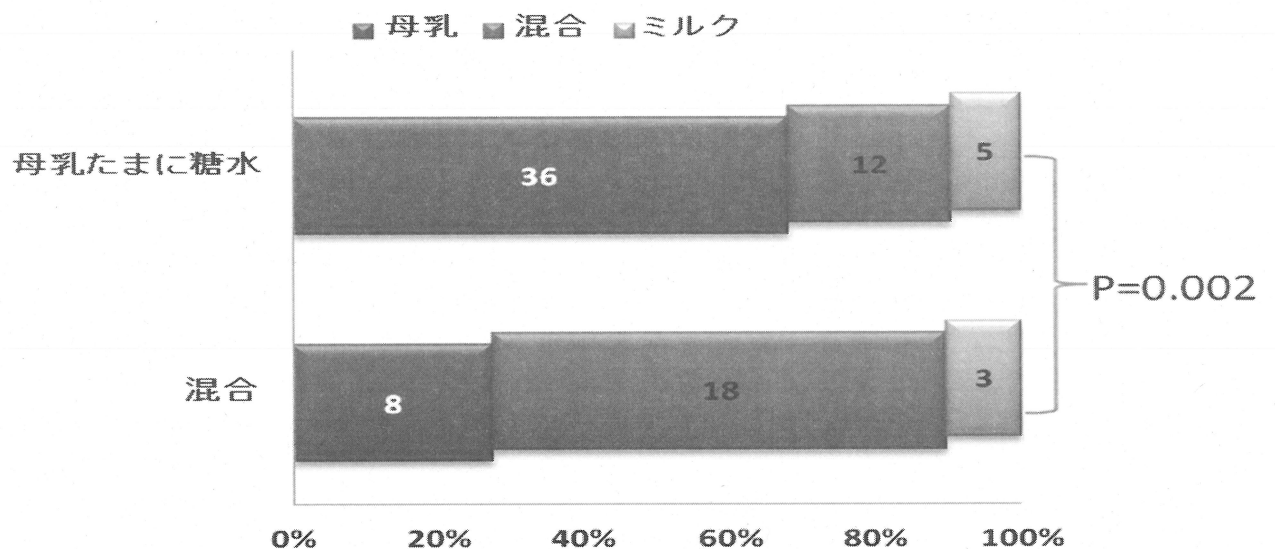


図3 入院中の母乳栄養確立状態と健診時の児の栄養状態

「上手に吸えない、吸わせられない」というのはスタッフの指導が不十分であり、また、ほかの業務が多忙であることにより授乳指導が行き届かないという背景があるのではないかと推測される。「頻回授乳が辛い」という回答の裏には「こんなに辛いとは思わなかった」という出産前教育の不足が考えられる。

LDRから母子同室を行うことも必要であり、妊娠中から母子同室のアピールをしていく、また、「今日はお産で疲れただろうから預かりますよ」など積極的な母子分離をする声掛けをしないようにするなど、スタッフ側の意識づけも重要である。

母乳栄養から混合栄養に変えた理由で「赤ちゃんの体重が増えないから」については、当院では経膈分娩パスでは5日目、帝王切開パスでは7日目に退院できることになっており、児の体重が増加傾向にない場合、退院を延期するか、退院1週間後に病棟で児の体重測定を行うことになっている。実際には退院を延期してまで母乳育児を頑張る母親は少なく、自宅が遠方、上の子が小さい、家庭の事情などで再来院が難しく、「予定通り退院したい」という母親がほとんどである。医療の方針により、児の体重増加は必須とされる条件下では、人工乳を加えることはやむおえない状況にあるからだと考える。

2. 入院中の母乳育児支援に対する満足度

母乳育児支援に対して「とても満足」「満足」と回答した人を合わせると82.5%と満足度が高いという評価であった。「とても満足」「満足」の理由の1つとして「母乳が出るようになった」があげられた。「上の子の時は全然出なかったおっぱいが4日目には母乳だけで大丈夫になったのでとても満足」「夜間母乳のみで過ごせると思っていたのですが、過ごすことが出来たり、だんだんと量も増えて、赤ちゃんが満足して寝てくれるようになった」などと記している。

橋本²⁾は、母乳育児支援にはエモーショナルサポートが重要であることを強調している。また、本郷³⁾は「母乳育児のエモーショナルサポートとは、まず、自分の感情をよく『聴いてもらえること』。次に普遍的で裏付けのしっかりした情報を提供してもらえること。そして、十分な情報の中で母親自身が選択できるとともにその選択を受容してもらえることが重要だ」と記している。今回のアンケートでも「指導・説明してもらえた」「看護者の対応がよかった」「尊重してくれた」等があげられ、内容として「その都度、授乳指導して

もらえ安心できたから」、「頻回授乳で疲れててもこまめに声をかけてもらって頑張る気になった」、「細かく指導してくれる方が全員だったため不安な気持ちがなくなった」、「いつものようにしていきたく私の意見を聞いてくれ、尊重してくれたのでうれしかった」などがあつた。このことから、スタッフがエモーショナルサポートの重要性を理解して母親に関わっていたため、母乳育児支援の満足度が高かつたのではないかと考える。

また、「なかなか上手く授乳できなかつた」「毎回担当が違うので相談しにくい」「スタッフによつてすごく親身になってくれる人と他の仕事が忙しすぎてやつつけ的に扱われることもあり差がある」「糖水やミルクを足したほうがいいのか迷つた時に相談にならなかつた」という理由も挙げられている。夜勤においては、分娩係が褥室を担当しており分娩が重なると褥室に伺えない事もあるため、指導が行き届かなかつたのではないかと考える。また産褥期では、入院期間が短いため同一スタッフの継続した関わりが難しい。そのためスタッフ同士の情報伝達・共有が必要であると考えられる。また、「尊重してくれた」と「糖水やミルクを足したほうがいいのか迷つた時に相談にならなかつた」が挙げられた。迷っている母親には医療従事者としての判断や意見をしっかりと伝え、そのうえで母親に判断を委ね、その意思を尊重して支えていくことが必要である。「乳頭保護器を勧める」タイミングもスタッフによつて違うことも挙げられ、使用のタイミングについては病棟の母乳支援チームとも協力していき統一を図りたいと考える。

3. 入院中の母乳育児支援に関する満足度別、特徴

1) 入院中の母乳育児支援に関する満足度と経膈分娩4日目・帝王切開6日目における授乳方法

産褥経過において、母乳栄養の確立が母親の母乳育児支援に関する満足度を高めていた。母乳確立に向けたケアの結果が母乳確立に表れ、満足感に繋がつたと考えられる。

2) 入院中の母乳育児支援に関する満足度と疲労度の関係

入院中の母乳育児支援に関する満足度を「とても満足」「満足」とした人は、あまり疲れていないという疲労度1, 2を選択した割合が有意に高かつた。母乳育児支援に関して満足感を持っている者は、疲労感を抱きにくい要因があると考えられる。

4. 入院中の新生児の母乳育児確立状態別の特徴

1) 入院中の母乳育児確率状態と健診時の児の栄養状態

入院中に母乳のみか、糖水を足す程度で母乳育児を確立できた人は、1か月健診時において母乳である割合が有意に高かった。入院中で母乳を確立できた人は、母乳の飲ませ方や育児に関する手技の上達から、母乳が確立できたと考えられ、家に帰ってからの乳房管理を自分自身で行う術を身につけた状態にあることが影響していると考えられる。そのため、入院中の母乳確立に向けた支援が退院後の影響も左右することが示唆され、母乳確立しなかった人に対するケアは現在、来院や電話訪問を行っているが今後は更に検討する必要があると考えられる。

おわりに

母乳栄養を希望していた人は約8割、退院時に母乳栄養であった人は約7割、1か月健診時に母乳栄養であった人は約5割であった。また、入院中の母乳栄養の割合が高い人は、1か月健診時の母乳栄養の割合が高いことが明らかとなった。このことから、退院までにチェックリストなどを用いて自律した母乳育児ができるよう支援していくこと、1か月健診時の母乳栄養割合が減少していることから、電話訪問や体重が増加傾向にない児の

フォローだけではなく、母乳継続を支援する母乳外来が必要と考える。

約8割の人が当院の母乳育児支援に対して満足している結果であった。また、入院中の母乳育児支援における満足度が高い人は、疲労度が低く、退院時の母乳栄養の割合が高いことが明らかとなった。このことから、疲労度にも着目し、母乳育児を支援していく必要があると考える。

今回、アンケートで疲労度の理由や入院中の助産師のケアや言動で印象に残ったことなどの記載をしてもらったが、それをカテゴリー化するまでに至らなかった。そのため、今後はカテゴリー化し、今回出た結果の根拠づけを行い、さらに深められるよう分析していきたい。

参 考 文 献

- 1)厚生労働省：医療機関における分娩件数と帝王切開娩出術割合の年次推移—昭和59年～平成20年—
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/hoken/national/22.html>, 2010.
- 2)橋本武夫：Baby Friendly HospitalとMother. Neonatal Care 7: 9- 12, 1994.
- 3)本郷寛子：母乳育児支援カウンセリング. 助産雑誌 54: 15- 20, 2000.